



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

学びの転移としての「対話する国際教養」：
パーソナルプロジェクトと課題研究の実践を通じて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤木, 正史, 小林, 万純 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00180041

学びの転移としての「対話する国際教養」

— パーソナルプロジェクトと課題研究の実践を通じて —

"Interactive International Education" as a transfer of learning

— Through the practice of personal projects and personal research projects —

「生徒主体の探究」グループ

国際教養委員長／社会科 藤木 正史

MYP コーディネーター／外国語科 小林 万純

1章 研究テーマとの関連

本稿では、2022年11月26日（土）に実施した本校公開研究会において「生徒主体の探究グループ」による公開授業とその後の協議会をふまえて、本校独自の学習領域である国際教養と学びの転移との関係について論じていく。

1節 【公開授業1】「対話するパーソナルプロジェクト」とテーマの関連

IBのMYPプログラムの集大成であるパーソナルプロジェクト（PP）に取り組むこと自体が、それまで身につけてきた経験的知識や専門的知識を再構築し、“学び”を転移させることになり、自身の興味関心を形にしていくことになる。

また、学習の方法におけるスキル（ATLスキル）はコミュニケーションスキル、協働スキル、整理整頓する力、情動スキル、振り返りスキル、情報リテラシースキル、メディアリテラシースキル、批判的思考スキル、創造的思考スキル、転移スキルの10のスキルがあり、これらはMYPにおいて教科の学びや課外活動を通して普段活用しているスキルであり、“学び”の転移へとつながる。スキルベースで身につけたことが他の場面でも活用できるのである。

さらに、“学び”の転移を「促す」ということに関しては交流する機会を設けること、教師の発話、先輩の熱意などが関わっている。同じ内容を用意して学ぶのではなく、それぞれがそれぞれの形で流動的に促されていくのである。

2節 【公開授業2】「対話する課題研究」とテーマの関連

課題研究は、本校1年次から様々な活動で取り組んできた「国際教養」の集大成として位置付けている。「国際教養」としての総合的な学習の時間・総合的な探究の時間はもとより、各教科・科目の“学び”で得た、課題発見力、課題解決力、レポートや論文の構成力、ポスターなどに落とし込む発信力等、様々な経験が“転移”・集約されるのが課題研究である。

2年次の数学科で取り組んだ統計グラフコンクールの経験が自身のテーマ設定のきっかけとなる場合もあれば、そこで得た統計データ分析の手法を研究方法として活用しようとする場合もある。本校でさかんなソーシャルアクション（ボランティアや寄付などを含む、社会をより一歩前に進める活動）に積極的に取り組んだことが、表面的ではない本質的な課題発見につながることもある。

そうした6か年をかけて同様の経験・異なる経験を積み上げてきた生徒同士だからこそ、課題研究においても他者の研究への指摘や評価を行うことができ、個々では気がつかなかった点への気づきを示すことができ、深いダイアログという“学び”の転移が生じる。

2章 【公開授業Ⅰ】対話するパーソナルプロジェクト

1節 「パーソナルプロジェクト (PP)」とは

本校は国際バカロレア認定校であり、MYP プログラムを1～4学年で実施している。その集大成として IB 機構へ提出するパーソナルプロジェクトを3学年から4学年の国際教養の時間を活用しながら進めている。

本校 PP ガイドによると、PP とは、個人で取り組むものであり、それぞれの興味関心に基づいて実施するプロジェクトである。まずは学習目標と成果物を決め、何を持って成功であるかを定義し、その規準を明示する。そこに向かって、提出までの期間内でどのように時間配分をするのか、試行錯誤の繰り返しを行うのか、他者からアドバイスを受けるのか、短期と長期の計画を作成し、常に見直しながらプロジェクトを進めていく。計画・実行・振り返りのプロセスを経た上で、最終的には作成し終えた成果物と自らの学びを振り返り、報告レポートを提出する。

3年生と4年生がパーソナルプロジェクトについて対話する機会は年に2回、年度によっては3回設けられる。2回の場合は2学期末と2月後半に実施、3回の場合は1学期末にさらに一回実施する。主に先輩から後輩へ伝承する形をとるが、質疑応答も含めて活発に行われるようにし、対話を重視する。

2節 授業の実践：2021年度 PP フェアおよび2022年度公開研究会での PP 伝承会から

昨年度の PP フェアと今年度の公開授業により、どのような転移がみられるかを考察する。PP フェアとは、4年生がその成果を3年生にプレゼンし、PP に取り組み始めた3年生と交流する機会であり、例年2月半ばに設定されている。2021年度 PP フェアの概要は、表1の通りである。

表1. 2021年度 PP フェア概要

- コロナ禍ということもあり、4年生の発表は3～5分程度の動画で事前に「オンライン展覧会」を実施。生徒と保護者がアクセスできるようにした。
- 当日は担当グループに関するコメントを同学年のグループメンバーとともに付箋に記入、それを持って対面の異学年での「交流会」へ参加。
- 交流会は10分ずつ5ペアがローテーションをしながら対話(図1)、ワークシート記入

研究会冊子にも述べたように、動画を見る、同年代と対話をする、その上で学年を超えて対話をする、という段階を踏めたことで、ワークシート上では内容理解、質問の抽出、疑問の解消、発展的な理解の順に進んだ思考プロセスが、メモが書き足されたりする部分で顕著になっている。

また、感想では以下のような内容が見られた。

3年生：

- 言っていることは共通しており、とても信頼できるお話も聞くことができた。今の自分に必要な事が明確になり、PPをどう進めるべきなのか理解できた。経験した人の話は頼りになる。4年生の苦勞を聞くことができ、自分のために生かしたい。

4年生：

- 自分で経験を語りながら再構築していくと課題研究についてのイメージも湧いてきた。
- 同学年の作品を見ることで、「こんな研究方法もあったのか」「こんなアプローチの仕方もあるのか」「こんな作品形態もあるのか」という様々な気付きを得ることができました。また、3年生に自分のPPについて話すことで良いフィードバックになったし、次の課題研究に生かすべき点が明確になりました。

これらの感想から分かるように、経験に基づいた同じ悩みを持った生徒同士だからこそ、説得力が増し、3年生の中での理解が深まった。そのことでより一層計画性やジャーナルの活用など、教師からも伝えていた重要なポイントが3年生の中で強調された。

4年生は3年生の悩みを聞くことで自らの悩みを思い出し、経験を振り返る過程で学びが再構築された。また、やる気に満ちた3年生からモチベーションを得た4年生もみられた。そのことで、次年度に取り組む課題研究の学びの転移へつながるきっかけとなった。プロジェクトを完成させた後に4年生同士で作品を見合うことで学びを得られたという感想も多かった。多様な完成品を見ることで、他の道筋も想像することができ、今後のプロジェクトの進め方での参考になった。

次に、2022年度公開授業で実践したPP伝承会の概要と様子については表2・図1の通りである。

- 20分2ラウンド制（4年生が移動）
- 4年生1名・3年生3名の3グループ
- 1ラウンドのスケジュール
 - 7分：4年生による発表・ワークシート記入
 - 3分：質疑応答
 - 10分：フリー対話
- ※ 3年生は二つの発表を聞くことになる。



表2. 2022年度公開授業概要

図1. 対話の様子（ジャーナル/作品/プレゼン）

授業では生徒は常に説明と質疑応答で忙しく、対話の絶えない時間となった。配分としてプレゼンテーションが長くなったり、それに関する質疑応答が長くなったりする場面も見られたので、生徒の伝えたいという気持ちを尊重しつつも相談時間が確保できるように、教師は4年生に次に進むよう促したり、3年生に自らの相談をするように促した。授業のワークシートでは、メモや質問も細かく書かれており、有意義な時間であったことが伺える。

生徒の感想の抜粋は以下の通りである。

3年生：キーワード [身近、想像しやすくなった、計画性、オリジナリティー、好きなこと、規準]

- 意外と身近な話からもアイデアが湧くことがわかりました。たくさん行うことがあったので、計画性の大切さも感じられました。印象深かったことは、みなさん成果物に自分のこだわりや好きなことを含めていたことです。
- どう進めていくか、振り返っていくかについてのヒントが得られて、少しだけなんとかなるんじゃないかという気持ちが湧いた。オリジナリティーには自分の体験を入れていくのが効果的かもと発表を見ていて思った。
- 実際にPPを行なった人たちからのアドバイスを聞き、よりPPを身近に感じた。得意なことをいかし、様々なことを考えつつPPに臨みたい。
- 目標や成功規準を多角的に複数設定することの難しさを感じた。特に後者は数値化する必要があるため、数値化しやすい成果物を作る方が好ましいだろう。
- 社会問題に関することをやらなくてはいけないという思いでいたが、美術の作品を見たり、カードゲームの作品を見たりして自分の好きなことに取り組みたいと思うようになった。PPに関して考えていなかったが、冬休み中にテーマを決めなければ間に合わないと思った。計画を立て、進めていきたい。作った作品を外部と連携してみたい。
- どの人も、自分の興味や苦悩、アイデンティティーをいかした研究を行っており、それによって生まれるオリジナリティーの価値について考えさせられた。私は現時点でまだプロジェクトのタ

イトルが決まっていなくても、その過程も大切であることを学んだ。限られた時間の中でいかに自分の予定を管理し、研究を進められるかが大切だと知った。これから自分の興味のリサーチをして、自分らしさを見つけ、有意義な研究にしたい。成果物の形態についても、それぞれのメリット・デメリットについて知ることができたし、大まかな1年間のスケジュールを想像できた。

- 自分のアイデンティティーをプロジェクトのトピックにしたことで、打ち明ける重要性に気づくことができる。また、自分に自信もつく。変化を恐れないことが新しい発見を生むことを学んだ。計画するにあたって、あらかじめ記録の方法を決めておくことで、統一感が生まれる。様々な記録方法を、特徴をもとに使用。

感想から分かるように、3年生はこの機会をととても貴重なもので学びが多いものだと感じている。2021年度と同様に、「より身近に感じられた」という感想から、実際に作成して提出した年の近い先輩から話を聞くことで現実味が出たことが分かる。

また、計画性は PP において非常に重要であるため、毎年話題に出るトピックであることが分かる。生徒がどのようなツールを使用したのか、実際に見せながらメリット・デメリットを説明することで、何を使用した良いか選択することにつながる。現に、ある生徒はスプレッドシートをパソコン上で作成(図2)し、ある生徒は付箋(図3)に書いていた。

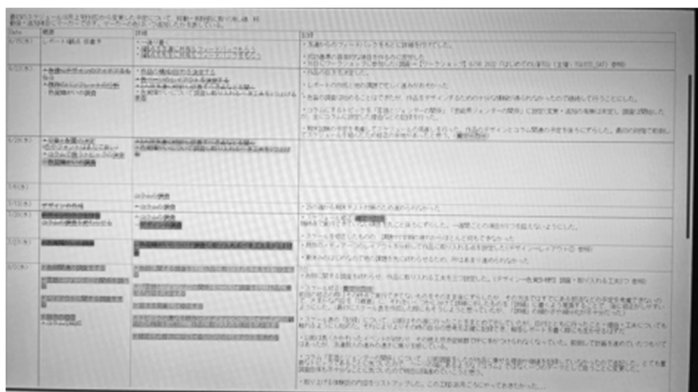


図2. パソコン上の計画

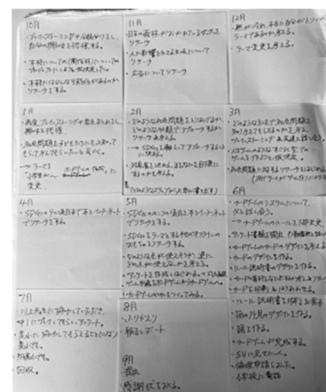


図3. 付箋の計画

「オリジナリティー」や「好きなこと」などのキーワードも感想に多くあり、社会問題に関連するようなことをやらなくてはいけないと思っていたところ、それよりも興味関心に基づいたやりたいことをやると良いというメッセージが強く伝わったことが分かる。

4年生：キーワード [振り返り、自信、伝えきれなかった、有意義]

- 伝えたいことが多くて時間がなかったが、改めてプロジェクトを振り返ると PP を通して自分が成長したことや、今後の学習に活かせるところを見つけられたと思う。3年生や多くの人に発表し、自分のアイデンティティーに自信がついた。
- なかなか自分が知っていて、自分以外が知らないことを説明するのは難しく、客観的に振り返りながら説明しなければいけないと思った。何を言って伝えてあげたらいいのかをよく考えながら話すのが難しかった。
- 昨年の今の自分を思い出して、自分が PP について抱いている疑問や不安ごとを考えながら発表できたので、3年生にとって何か1つでも役に立つことが見つかったらいいなと思いました。3年生が思っている以上に質問してくれたので、時間が余ってしまうのではないかという不安もなく、有意義な時間を過ごせたのではないかと思います。質問したり、深掘りしたり、ノートを見せて共に考えたりと対話を意識して進められて良かったと思います。

4年生は自らのプロジェクトを振り返る機会になり、2021年度と同様に本人の学びにつながった。プロジェクトを伝えて認めてもらうことや、後輩の役に立っているという点で4年生の自信にもなった。むしろ伝えきれないことが多く、たくさん伝えたいという思いが見られ、有意義であった。

転移スキルが発展する経緯として昨年度と今年度で共通して見られることは、スキル、アイデア、モチベーションの転移である。スキルとしては、具体的にどのような手法でスケジューリングやブレインストーミングをしたか知ること、どのような場合に効果的なのか、どのような学習者が適しているのか、学びとることができる。複数の先輩から聞くことで、比較しながら良いものを探ることが可能になるため、多様な実践を知ることが不可欠である。

アイデアに関しては、3年生の時点では漠然としていた自分の案を、実際に具体化してプロジェクトを完成させた先輩の話聞くことで、現時点では漠然としていてもその先にどのように進むか道標が見えることにつながる。また、社会的に良いものよりは、自分にしかできないオリジナルな好きなものを選ぶ必要があるとメッセージを受け取った。全体での説明は教師からしているものの、身をもって体験した年の近い先輩に直接アドバイスをもらえることでより強くメッセージが伝わる。

また、このような体験がモチベーションにもつながる。誇りを持って、完成したものをプレゼンテーションする姿を見て、自分も好きなことを形にしていこうと意気込んでいけるのである。計画性についても、そのスキルと共に後悔や焦りが含まれたアドバイスがもらえるため、冬休みから開始しようというモチベーションにつながるのである。

想定どおり4年生から3年生の影響は大きかったが、それと同様に、同学年同士や3年生から4年生への影響も大きく、学びを転移させた経験を共有することが、それぞれの生徒の中での転移を促進するものとなり、学習者として転移スキルを発展させることにつながった。また、その知識を用いながら学びを再構築することで、他の学びへも転移させようと生徒が意識することがわかった。

今後も対話の機会を提供することを通して、生徒の学びの転移を促していきたい。

3章 【公開授業Ⅱ】対話する課題研究

1節 「課題研究」とは

5年次・6年次に設定されている「課題研究」は、「国際5（課題研究Ⅰ）」「国際6（課題研究Ⅱ）」と同時開講という形で実施している生徒主体の探究活動である。2022年度は水曜日の6限に設定されており、またこの時間以外にも、生徒が能動的に研究を進めることが求められている。

研究は、個人研究およびグループ研究のどちらでも構わず、異学年でのグループ研究も認められている。なお、生徒は自然科学系のサイエンス部門と、人文科学系のグローバル部門のいずれかを選択しており、教員1名につき研究テーマが大体10本前後になるように調整し、今年度は18講座開講している。今年度のテーマ数は、サイエンス部門が41テーマ、グローバル部門が130テーマであった。

成果物としては、「国際5」は中間論文、「国際6」は最終論文の提出を課しており、それぞれを評価している。形成的評価としては、年度当初の研究計画書や中間報告としての研究経過報告書の提出、研究発表会などでフィードバックの機会を設け、また週1時間の「国際5」、「国際6」の時間内において、対話を通じた研究指導におけるフィードバックを行っている。そのフィードバックの方法は、各研究指導者に任せられている。

総合的評価については、中間論文、最終論文を生徒研究競技会として設定している ISS チャレンジのサイエンス部門、グローバル部門それぞれの評価基準を用いて点数評価をし、その評価に基づき総合的な探究の時間として文言評価を行う。なお、研究指導者が任意で各評価基準に対するコメントを行えるようになっており、生徒には個々に数値評価とコメントが入ったペーパーを示している。なお評価については、2023年度より課題研究の枠組みが変更されるため、2022年度までの方法である。

2節 授業の実践

授業者が担当している講座には、5・6年生あわせて14名が在籍し、あわせて12本の課題研究を指導している。週1時間の「国際5」「国際6」の時間はゼミ形式で実施している。3グループに分け、1回の授業で1グループ4本の研究報告を行い、他の2グループはリサーチや次回のプレゼン準備を行う。研究報告は、作成したレジュメをもとに行い、授業者およびグループメンバーから質問や意見などがあがり深めていく。他者の研究を聞き、意見をもらうことで、それぞれの進捗に相互に刺激を受け、また新たな気づきなどが得られると考えている。

時間割外の活動については、生徒側からアポイントメントを取って個別対応という形をとるが、複数の研究チームを同時に対応することもある。研究内容そのものの検討だけでなく、外部連携先への依頼状の書き方の指導や、実際にオンラインで行われる研究協力者の方とのインタビュー調査に同席することもある。

公開授業時には、2つのグループに分かれてレジュメをもとにした報告をそれぞれ2本ずつ行い、グループ内で検討を行う様子を公開した。



図4-1. グループ1の様子

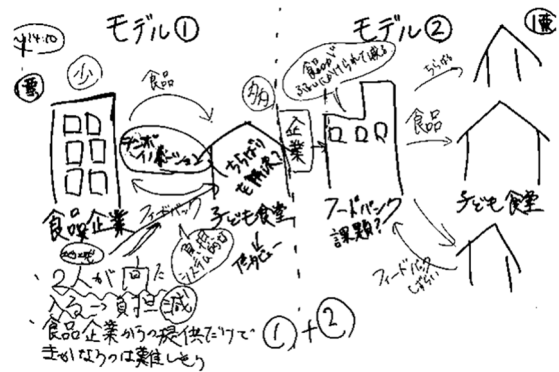


図4-2. グループ1の議論の可視化

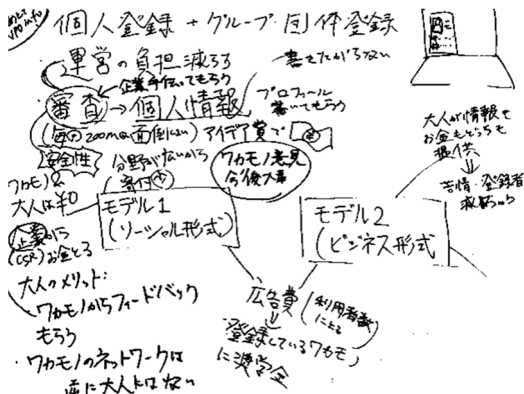


図5-1. グループ2の議論の可視化



図5-2. グループ2の様子

公開授業では、10分程度のレジュメを用いた報告の後、同グループのメンバーから質問やアドバイスを飛び交い、それらはホワイトボードに可視化されていった。とくに司会等を決めたわけではなく進行は生徒に任せた。発表者が進行を担うチームもあれば、ホワイトボードへの可視化を発表者以外が担うチームもあった。可視化されることで議論の軸が定まり、自然と対話＝ダイアログが生まれていった。

4章 “対話”の効果と必要なコト ―協議会から―

1節 “対話”の効果

授業実践後の協議会では、まず本校の国際教養についての概略を述べ、続いて授業者から実践の報告・質疑応答を行った。参加者同士の”対話”についてのグループダイアログも行われ、「発表者に対してここまで意見が出る機会がない。1年からの積み重ねや方法論があって成り立つのではないか。」「先輩から後輩へつなげるという学校の文化ができていい。生徒が一步ひいてしまうような姿勢になりがちで、そのような生徒に積極性を持たせる工夫はないか。」など、本校生徒に対話の文化ができていいことを評価する意見や、一方で誰もがそうした積極性を持てるのか、引いてしまう生徒もいるのではないか、という質問があがった。授業者からは、「楽しくやろうということは常に言っている。学年と連携して外部講師の講演の機会を設ける等、様々な機会をつくるよう心がけている。」「PPフェアという全員が発表する機会では、勉強が苦手でもPPの成果物で音楽を作成するなど、その作品を後輩に伝えることで自信になることがある。ISSチャレンジで発表する先輩の姿にあこがれる生徒が多い。」など、対話の機会こそが、生徒へのエンパワメントになると発言があがった。

図6にあるように、対話は拡散から始まり収束していく。その際に、その場にいる生徒同士がお互いに提案や意見、アドバイスを交わすことによって、螺旋を描くように最適解へと辿り着く実感を得ることが大切である。「最適解が自分たちの中にあっただ」、「自分たちで到達できた」、「誰かの役に立てた」、という成功体験の積み重ねが、自信や自己肯定感につながり、次の段階への動機やさらなる他者への貢献につながり、活動が楽しくなり、自分たちで探究するという意識が高まっていく。探究活動の深化・質の向上につながると言えるだろう。その際、教員は、生徒相互の対話に任せ、グランドルール（例えば、「相手の話は最後まで聞く」「自分ばかり話さない」「決して否定はしない」など）の設定や、話しやすい環境を構築することで、支援する姿勢が必要だろう。別の視点の提示や、可視化の促し、伝え方の指導（論点を明確にしたレジュメの作成方法など）などでも支援ができる。

2節 タテとヨコの対話

協議会では小グループでの対話についてのダイアログから、「転移のところで、先輩から後輩に伝えるというのはいいが、新しい学校の場合にはどうすればいいか。」という意見があがった。本校は縦

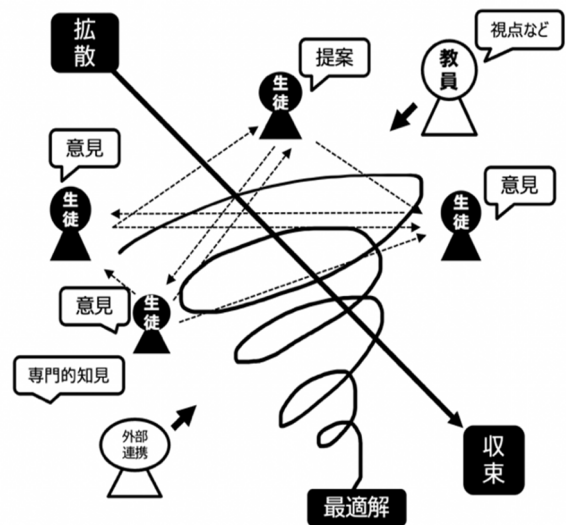


図6. “対話”の効果

のつながりについては、PP や課題研究の複数学年による発表会や社会貢献活動に関する先輩から後輩へのプレゼンなどで、少しずつそうした文化を構築してきた。校内におけるタテの繋がりだけでなく、これまでに 10 回生を数える卒業生とのタテのつながりの強化をここ数年はかかってきた。本校の同窓会組織は課題研究の支援のために、後輩の研究に対して支援可能な会員をリスト化し、人材バンクとして提供いただいている。教員を通してつなぐことで、本校で課題研究などの活動を経験した先輩から、経験にそくしたアドバイスを受けることができる。4 年次の課題研究の準備期には、同窓会より自然科学系、人文社会科学系の人材派遣を依頼し、後輩へとその経験を伝えてもらう機会を設けている。ただし、まだ練馬区の他の学校など、といったヨコのつながりは薄いように感じている。今年度は、本校を訪問した大阪の高校生と課題研究について発表・交流する機会があり、参加した生徒からは非常に良い経験となった、という感想があがった。今後は、そのような機会をさらに増やしていきたい。今年度の PP フェアでは、IB 校であるさいたま市立大宮国際中等教育学校より生徒の参加が計画されている。

さらにヨコの対話として、教員同士の経験や指導方法の共有を積極的に行う必要があると考えている。外部連携リストの共有と蓄積、効果的であった指導方法の記録などがこれに当たる。教員が探究に取り組む時間を確保し、教員間の対話を促進し、気づきや学びの転移を促すことが、指導する生徒の充実した研究・探究活動につながる。

「国際教養」はきわめて学際的な取り組みであり、教員同士の気づきや学び、経験の転移が必要とされる。様々なタテとヨコの対話を有機的に組み合わせ、アーカイブを意識し、共有化、発信していくことで本校独自の学習領域である国際教養は、まさに「対話し続ける国際教養」として、本校における様々な”転移”のハブとなり、学校文化の中心となっていくと考えられる。

参考文献

- 国際バカロレア機構. 『「パーソナルプロジェクト」指導の手引き』. 国際バカロレア機構. 2021.
東京学芸大学附属国際中等教育学校. 『パーソナルプロジェクト生徒用ガイド 2021-2022』. 2021.
東京学芸大学附属国際中等教育学校. 『第 8 回 TGUISS 公開研究会 「学びの転移」を促す概念・文脈の活用 国際バカロレア (IB) の教育システムを活かした探究学習』. 2022 年 11 月 26 日.

"Interactive International Education" as a transfer of learning

— Through the practice of personal projects and personal research projects —

Abstract

This year, a "student-centered inquiry group" was organized as one of the school's research groups, and conducted research and class openings.

In the open class, we were able to show the students actively engaging in dialogue, and it was demonstrated at the meeting that this is based on a variety of vertical (with students in different grade levels and supervisors) and horizontal (among peers) connections.

Through the various activities of the "International Studies" program, a culture of dialogue is fostered in the school, and this leads to a transfer of learning among students.

Further expansion of the vertical and horizontal connections will lead to the further enhancement of the "International Studies" function as a hub for various transitions.